

残存する「戦後日本型循環モデル」 打開で新たな社会の構築を

2020年1月16日、日本で初めての新型コロナウイルス感染者が報告された。この第1例目の方は、6日に武漢市から日本に帰国し、14日に診断されていた。その後、日本国内では第7波まで感染流行が続いており、終息の目途はたっていない。その間、契約社員が雇い止めとなる、派遣社員が派遣切りとなる、いわゆる「自粛」により飲食店が事実上営業できなくなる、事業所自体が倒産や廃業となり失業者が増えるなどの現象が発生し、現在に至っている。

雇用に関するそれら諸問題は、コロナ禍以前から社会問題視されていたが、コロナ禍により一層悪化が際立ち、さらに付随する様々な問題を露呈した。

今回は、教育社会学が専門で、日本の教育と仕事、さらに家庭の特徴を豊富なデータ、資料を分析し、広く社会に発信し続けている東京大学大学院教育学研究科教授の本田由紀氏に日本の貧困問題、それと関連が深いものの、世界的に対応が遅れている日本のジェンダー問題などについてご意見を伺った。

東京大学大学院教育学研究科教授 本田 由紀

INTERVIEW

——コロナ禍でさらに拡大した貧困とその特徴について伺います。

コロナ禍は日本経済全体に打撃を与えました。一番影響を被ったのは、非正規雇用者や母子家庭の人たちを含む、コロナ禍以前から収入が少なく生活が苦しかった方たちです。特に、仕事と子育てを掛け持っていたような女性には、仕事と家庭生活の両面でしわ寄せが生じました。元々、非正規雇用は正規雇用との賃金格差が大きかったところへ、22年の「営業自粛」要請や移動制限などにより、サービス業が包括されている第3次産業、特に対人的な接触が多い飲食業や観光業などで、今まで通りの業務ができなくなりました。その結果、これらの産業で働いていた多くの非正規労働者が一層苦しくなりました。

——コロナ禍以降、女性の困窮が際立ったと言われていますが、なぜでしょうか。

先に挙げました飲食業、観光業に加え、介護職や医療職、保育職など、高齢者や子どもに直面してお世話をしたり、接触する機会の多い職種、いわゆるケアワークに女性が多く就業しています。職を失わなくても、コロナが感染爆発した時には、自分自身に降りかかっている高い感染リスクを知りつつ懸命に働いていたのに、世間からはその感染危険性をもとにパッシングが行われたりもしました。

さらに、学校や保育園、幼稚園で感染が起きると一斉休校・休園になり、学校と園で収容できなくなった子どもは自宅に帰され、その世話には主に女性が担うことになりました。また、会社へ出勤していた夫がリモートワーク導入により自宅で仕事を始めると、在宅の夫の世話も女性の役割に加わりました。家族が外部から閉ざされて内部で担うものが増大し、その負担のほとんどが女性に強いられました。

日本では、家族の世話や家庭のことは主に女性の役割とされ、しかも女性自身がそれを内面化して引き受けてきました。だからこそ、女性は外で働いていても、責任や労働時間が軽めである非正規雇用を選ぶ場合が多かったのですが、そうした従来からの様々な問題が、より濃厚な形で出現したのがコロナ禍でした。

特に20年の前半には、仕事や収入が減ってしまった女性が多く、就業率は大打撃を受けました。しかし、その後はじりじりと女性の就業率が回復してきています。これは、介護職や医療職での女性の雇用、就労の需要が大きいためです。しかし逆に、男性の就労は漸減し続けており、男性が被った被害は無視できません。男性の就労が減っている職種は「その他」、つまり雑役に近い仕事で、男性の一部がそうした仕事さえ続けられない状況になっていたのです。

日本社会の問題点とジェンダー不平等

——根底にある日本の社会が抱える問題点を教えてください。

問題なのは、日本が敗戦から経済的に世界一に踊り出ることを可能とした「戦後日本型循環モデル」です。これは、高度経済成長期に日本でできた教育・仕事・家族を、それなりにうまく回していた独

特な仕組みで、「男性は仕事、女性は家庭、子どもは受験競争」に進進するという、性別と世代による明確な分業を特徴とするモデルです。教育・仕事・家族の間で一方的に資源が流れ込み合うような循環関係が60年代を中心として形成され、その後のオイルショックを経て社会全体に浸透しました。79年に刊行されたアメリカのエズラ・ファイエル・ウォーゲルの著書のタイトル「ジャパン・アズ・ナンバワン」が象徴するように、高度経済成長期の日本はミラクルな成功で沸いていました。

その「戦後日本型循環モデル」は、90年代以降、バブル崩壊などとともに、様々な形で破綻してきています。しかし、このモデルの中で壮年期を生きていた人たちが、新たな社会のあり方に適応できないまま、高齢になった今も多数存在しています。そして、その中の男性層に発言力・権力・財力が偏っており、社会の仕組みがその人たちの意識や考えに引っ張られ続けている。このことが、今の日本社会全体が新しい時代や仕組みに対応できなくなっている原因だと思います。国会を見ても分かるように、未だに80歳以上の男性議員がかなりの数で在籍していますが、その人たちは「自助により自分のことは自分で、それができないなら共助で。日本はそういう家族、男女で回ってきた。それが美しい日本のあり方だ」という発想が強いわけです。

そのような人たちが仲間内で権益を回し合って変革を遅らせ、日本の経済、科学技術などの低迷状態を招いたのだと考えています。また、そのような家族像が今でも日本の女性の意識の中にも刷り込まれており、生真面目な女性ほど自ら進んで「家族のことは、私がやらなければ」と意識し、収入の低さや家事育児負担にそれぞれ孤独に苦しみながら、必死で生きている。これが今の日本社会の実像です。このことが、国際比較でも明らかに著しい日本のジェンダーの歪みの実像です。

これに対し、アメリカやスウェーデンなどでは、家族あるいは友人まで含め、「人間は男性、女性にかかわらず、それぞれが個人で、互いに精神的に助け合いながら、多様で自由な形で生きていけばいいんだ」という発想になっています。

——ジェンダー問題は女性の立場から語られることが多いですが、男性の立場も含めいかがでしょうか。

先日、新聞で男性が仕事と自分の活動をどう考えているのかを指摘しました。実は、女性の有償労働と無償労働の時間配分は世界水準とあまり変わりません。しかし、男性の場合は有償労働の時間があまりにも多く異常な状況であり、まるで働くマシンのようになっていきます。男性も理想としては個人や家族のための活動を優先したいと考えていますが、現実には仕事第一主義になっており、この理想と現実の乖離があまりにも大きいことが、男性の幸福度の低さや自殺率の高さに深く関わっているのです。男性がそのような仕事中心の状況になると、女性も「家族のことは、私がやらなければ」と考え、家庭内の全責任を背負いがちです。しかも、この男性と女性の生活状況や社会的役割がひどく違っているために、人間として大事なことを男女が共に考えるということが難しくなっています。これを改善しようと思わないのが、日本社会を牛耳っている年齢層や政権与党です。彼らは、本当にその改善が必要だと思っておらず、これまで通りでいいと考えているため、そもそも変革のための「ギア」「ベクトル」「エッジ」が非常に弱い。だから社会が変わらないのです。アメリカやスウェーデンでは、もっといろいろな形の家族があり、幸せ、精神的充足が大切とされています。日本を変えていくには強力な変革が必要なのです。しかし、安倍晋三内閣時代に「女性の活躍」云々と言われましたが、心底、深いところを変えようとは

考えていませんでした。

——歯科についてお聞かせください。

私は、歯科医師のご夫婦が営む歯科診療所に通院していますが、全体を仕切っているのはご主人で、お子さんが学校から帰ると、真っ先にその世話に当たるのは奥さんです。また、歯石をとるなど補助的な役割を担当しているのはほとんどが女性です。女性がある程度安定性の高い歯科の職場にたくさん就業できることは、ありがたいことではあるかもしれませんが、もっと女性が歯科業界の中で補助的業務だけではなく形で活躍できないかと思っています。また、患者さんの中にも男性、女性がいるのに、対する専門職のほうがちがいに偏っているのは、不自然だと思います。歯科医師国試の女性の合格率が上がりつつあることが、今後、どのような形で表れてくるのか、関心を持って見ていきたいと思っています。

——大切にしている言葉。

ひとことで言うところ「あきらめない」です。私は、日本の悲惨さを見渡すような仕事を続けており、心が折れそうな状態に繰り返し陥ります。でも、なんとか数千年ずっと続けています。このような研究をやめたり日本をあきらめたりする判断は一瞬でできます。しかし私は、「今、あきらめることもできるけど、とりあえずあきらめない。今この瞬間はあきらめないでやってみよう」と考えることにしています。

——本日はありがとうございました。

■ 書籍プレゼント 会員5名様限定

今回、インタビューでご紹介させていただきました本田由紀さんのサイン入りの著書『日本』ってどんな国？ ―国際比較データで社会が見えてくる』を会員5名様にプレゼントさせていただきます（お1人につき1冊まで）。ご希望の会員は、官製はがきに「11月号 書籍プレゼント」と明記し、必ず以下の4点を記入のうえ、協会プレゼント係までご応募ください（複数応募不可）。応募締め切りは11月21日（月）です（消印有効）。当選発表は、書籍発送をもって代えさせていただきます。

【応募はがき記載事項】

①氏名 ②会員番号 ③電話番号 ④住所

応募送付先 〒169-0075 新宿区高田馬場1-29-8

いちご高田馬場ビル6階 東京歯科保険医協会

11月号 書籍プレゼント係まで



～著書紹介～
家族、ジェンダー、学校、友人、経済・仕事、政治・社会運動について世界各国データと比較し、日本がどんな国か考えてみよう。今までの「普通」が変わるかも！？

© ちくまプリマー新書